

イネ縞葉枯病の再流行にご注意を

【背景・目的・成果】

1980年代、イネ縞葉枯病により減収する被害がりましたが、防除を徹底したため1990年代に事態は沈静化しました。ところが、2008年以降、県西部を中心に、イネ縞葉枯病の発病株率が増加しています。さらに、イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメビウンカの割合(保毒虫率)も上昇傾向にあるため、再び本病が流行する可能性があります。

イネ縞葉枯病の症状



ユウレイ症状
田植え直後の感染による。この後、枯死するが、それまで伝染源となる。

出すくみ
幼穂形成期頃の感染による。直接の減収につながる。

ひこばえでの発病
ヒメビウンカ越冬世代の保毒虫を増やす。

発病株率と保毒虫率の関係



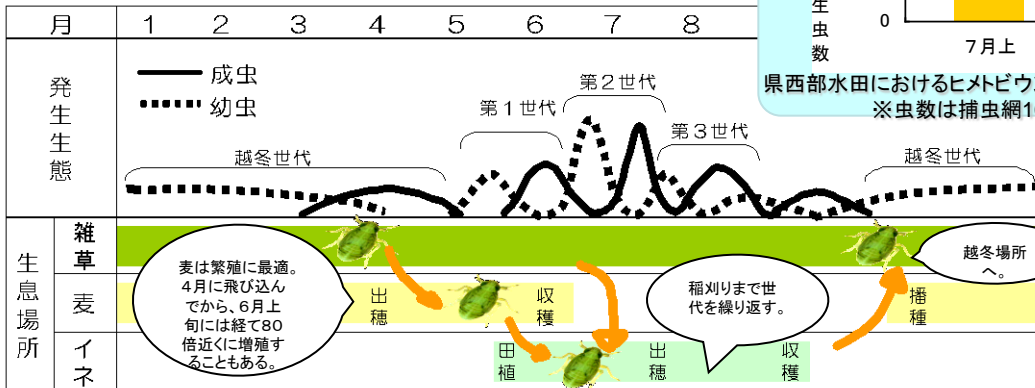
県西部地域での8月下旬におけるイネ縞葉枯病発病株率と麦でのヒメビウンカの保毒虫率

ヒメビウンカ



吸汁による被害はほとんどないが、イネ縞葉枯ウイルスを媒介する(保毒虫)ため問題となる。
保毒虫になるには・・・①イネ縞葉枯病が発病した株を吸汁する。
②保毒虫の次世代に伝染する。

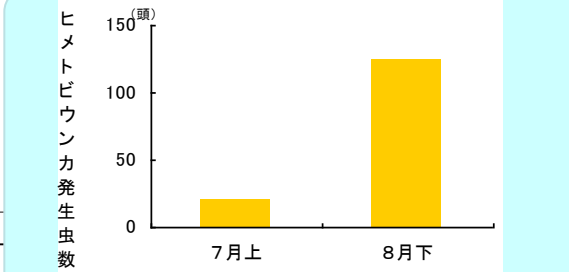
ヒメビウンカの生活史



麦は繁殖に最適。4月に飛び込んでから、6月上旬には経て80倍近くに増殖することもある。

稲刈りまで世代を繰り返す。

越冬場所へ。



県西部水田におけるヒメビウンカの発生虫数の変化(2011年)
※虫数は捕虫網10回振りあたりの値

水田ほ場内で世代を繰り返すなかで、虫数が6倍近くに増加。
→イネ縞葉枯ウイルスの保毒機会が増。
→イネ縞葉枯病の発病が助長されやすい状況。

【技術の活用】

イネ縞葉枯病の対策には、媒介昆虫であるヒメビウンカの生活史を考慮した対策が必要です。～ヒメビウンカの増殖を抑える・イネ縞葉枯ウイルスの保毒機会を減らす・イネの発病を減らす対策～

1. 畦草の管理により、ヒメビウンカの越冬場所をなくします。
2. 5月下旬頃に麦ほ場で防除を行い、ヒメビウンカの増殖を抑えます。
3. 田植え時の防除により畦や麦ほ場から飛び込んだヒメビウンカの増殖を抑え、7月頃の発病(ユウレイ症状)を抑えます。
4. 7月中～下旬の薬剤防除によりヒメビウンカの増殖を抑え、8月頃の発病(穂の出すくみ)を抑えます。
5. 水稻収穫後に稲株をすき込み、ひこばえの発病株を発生させないことで、イネ縞葉枯ウイルスの保毒機会を減らします。